

地方都市における祭りの進化と分化

—山口七夕ちょうちんまつりの「大内起源説」とその流用に着目して—

The Expansion and Specialization of the *Matsuri* in Regional Cities: Focusing on the Idea of *Ohuchi Clan Origins* and Its Appropriation in the Yamaguchi Tanabata Lantern Festival

張 玉玲 (文化人類学)

ZHANG Yuling (Anthropology)

Abstract

This article examines the Ohuchi origin of the Yamaguchi Lantern Festival from historical and anthropological perspectives, and argues how its role as a religious and historical factor has changed along with the expansion and diversion of the Yamaguchi Lantern Festival, which underwent a great transformation during the urbanization of Yamaguchi City after World War II.

It is obvious that the religious and historical relevance of the Ohuchi clan has been erased as the Yamaguchi Lantern Festival changed into an amusement for urban residents. The festival shares a fate common to festivals in other cities in postwar Japan as they experienced rapid economic growth and urbanization. On the other hand, by emphasizing religious and historical relevance with the Ohuchi clan, some activities have been promoted recently by local associations to create a common sense in residents and strengthen ties within the community. Such activities might be regarded as strategies to solve problems such as population outflow and an increasingly aging society, two issues which are more serious in regional cities than metropolitan cities.

I. 問題の所在

毎年8月6日、7日の2日間、山口市中心商店街を中心に、七夕ちょうちんまつりが行われる。長竹竿一本に約40個の紅ちょうちんを付け、一つ一つ手作業で火を灯し、中心商店街は、さながら紅ちょうちんのトンネルの様相を呈する。このようにアーケード内でちょうちんに火を灯すのは全国的にも珍しく、期間中、山口を中心に周辺地域から20万人ほどの観光客を集め、賑わう。いまや七夕ちょうちんまつりは、山口の夏を代表する風物詩となっており、山口の三大祭り¹の中でも、もっとも規模が大きく、山口市観光産業の一大支柱となっている。

山口七夕ちょうちんまつりは、室町時代に山口を本拠として領国を治めていた守護大名の大内盛見（1377–1431年）が父母の冥福を祈るため、お盆の夜に笹竹の高灯籠に火を灯したのが始まり²とされる。現在、先祖供養あるいはお盆行事の一つとして紹介される（松尾2014）こともまれにあるが、青森のねぶた祭りや徳島の阿波踊りなどと同様、現代的都市生活を享受する人々の消費文化の一つに過ぎず、「カミ（神）」の存在などその宗教性は殆ど意識されない都市まつりとなっている。

その一方で山口七夕ちょうちんまつりと同じ時期に、かつての山口街の中心地であった大殿地区において、

1 三大祭りとは、七夕ちょうちんまつり、祇園祭（7月20～27日）と天神祭（11月23日）とされる。

2 山口市ふるさとまつり実行委員会による七夕ちょうちんまつりパンフレットをはじめ、各種のガイドブックに類似の内容が記述されている。

2009年から地域住民による手作りちょうちんまつりが執り行われるようになった。さらに2012年には、同じく大殿地区にある大内氏ゆかりの築山神社において大内氏歴代御霊なごめ祭が「復活」した。それぞれ地縁の復活と地域文化の保存を目的とする動きであるが、ちょうちんまつりの起源とされる大内氏との歴史的、宗教的関連性が前面的に強調されているところが共通しており、この点において都市型イベント的な（以下「都市祭り」とする）祭りとなった七夕ちょうちんまつりとは対照的である。七夕ちょうちんまつりの大内氏起源説は、ここで何か特別な意味付けがあるのか。あるとすれば、その内容とは何であろうか。

山口七夕ちょうちんまつりを戦後発展した都市祝祭のカテゴリーの中で捉える時、それに関連する先行研究は、米山（1974、1979、1986、1989）、中村（1972a,1972b,1987）、松平（1980、1990、1994、2008）、竹元（2014）など、数多くある。これらの研究は、共時性と通時性の両方のアプローチ³から行われてきたが、1960～70年代における中村、米山らの研究は、祭りの生成過程における関係性や共同性の形成に注目する共時的分析に重点が置かれているのに対し、1980年代以降の松平や竹元らの研究は、都市化が進んだ地域社会構造を把握するために通時的分析手法が重んじられている。特に、松平は産業社会が解体し、脱産業化への指向性が強まりつつある現代の特徴が「『コンサマトリー（自己完結的）な価値を追求する、＜楽しみを＞視野に入れた生活の方向』にあるとすれば、現代の祝祭は、現代生活文化の在り方を見据える重要な指標の一つとなりうるであろう」（松平1990:3）と指摘し、伝統もカミ（神）もそして共同体的社会統合も欠く都市の人々にも祝祭の存在を認められるように、日本の都市で盛んになりつつある「祝祭的」行為を広く包み込んだ、広範な概念としての「祝祭」を取り上げる必要があると主張した（松平1990：13）。

こうした主張の背後には、戦後の高度経済成長期を経て、かつて家族レベルと行政単位との間で多くの機能を担ってきた町内会などの「地縁集団」が機能を失い、その代わりに職場、会社、結社、団体、政党、教団などのような社縁関係、社縁集団（米山1986：43）が重要性を増すようになったという時代的背景がある。都市祭りの文脈においては、生活の要にあつたはずの「カミ」（神）が姿を消し、そして「スル」（ミセル）当事者と「ミル」観客が向き合う形（松平2008：192）に変わった。「伝統」の制約を嫌う若者の担い手によって、祭りは新たな要素が次から次へと取り入れられるようになり、年々イベント化していく。しかしこれらはすべて都市の発展に合わせた形で生じた変化であるからこそ、今後も都市とともに進化していくものと、肯定的に捉えられるべきだ（松平2008）という。

明治初期山口の再復興と戦後の都市化の進展とともに進化してきた七夕ちょうちんまつりについては、以上の理論を援用することで分析可能であろう。しかしこれだけでは、冒頭で述べたような、近年山口七夕ちょうちんまつりの大内氏との歴史的・宗教的関連性がよりローカルの文脈で強調され、復活している一連の動きについての説明がつかない。「大内氏の祖先供養としての七夕祭り」という言説が、地域の住民にとってどのような意味を持つのか。大都市部への人口流出に加え、高齢化、少子化など地方都市特有の諸問題と関連付けて、都市全体の社会構造のみでなく、よりローカルな地域社会における地縁の再構築なども視野に入れた多角的な分析が必要であろう。

本稿では、七夕ちょうちんまつりの「大内氏」との関連性を歴史的、民俗学的視点から捉えなおした上で、山口の都市発展とともに進化してきた七夕ちょうちんまつりの歴史を整理する。それを踏まえて、大殿地区の住民による手作りちょうちんまつりと築山神社の御霊なごめ祭の動きについて分析することによって、特に地方都市にとっての祭りの持つ今日的機能や意義について検討する。

3 共時的分析手法とは、祭りに関係するそれぞれの社会主体が、祭りの生成過程でどのような関係性によって共同性を形成するのかを考察するものである。それに対し、通時的分析手法とは、祭りの変容や異質性に注目して、その要因を社会変動の趨勢において明らかにすることで都市化社会の本質をとらえるものである。

II. 城下町としての山口と「大内氏」

II-1. 山口街の誕生と発展

山口の地名が確認できる最古の史料は、建長6年(1254年)在銘の円政寺金鼓(鰐口)である。そこから、山口には鎌倉時代中期にすでに寺院を持つある程度の集落があったこと、大内氏が居館を移す前の山口は、十字街に結節する街道に沿って発達した市場町的集落だったことが推測される(山口市1971:20)。

1360年頃に、長く大内村に蟠踞していた大内氏(弘世)がその居館を山口に移したのち、円政寺の北に居館を構えることによって従来の市場集落と結びつき、城下町としての都市形態が徐々に整うようになる。それから100年後の文明17年(1485年)に、大内氏は家臣を山口に居住せしめ、年中の百カ日に限って在所に滞留することを許す旨を定めた(山口市1971:21)。この時点で山口はすでに城下町としての規模が整っていたと見てよかろう。大内氏の家臣団の集中居住は、城下町の山口にとって大きな消費力となり、彼らの需要を満たすべくさらに多くの商工業者が集まった。こうして、今日の商店街が並んでいるのとはほぼ同じ区域に商工業者の町家が立ち並んだのである(山口市1971:61)。当時の都である京都を模して造られた山口街は「西の京」と称され、一の坂川を中心に、街が東西、南北の通りに整然と区画されていた。役人や使節、商人などが頻繁に去来し、当時の西国で一、二を競う繁栄ぶりを見せていた。その規模は、戸数一万以上という、全国でも屈指の都市(山口市1971:63)に達していた。今日の山口市にある大殿地区と白石地区は、ほぼ当時の山口街に相当しており、大内氏の居館の前にある通りは大殿大路と称されるが、居館の西側

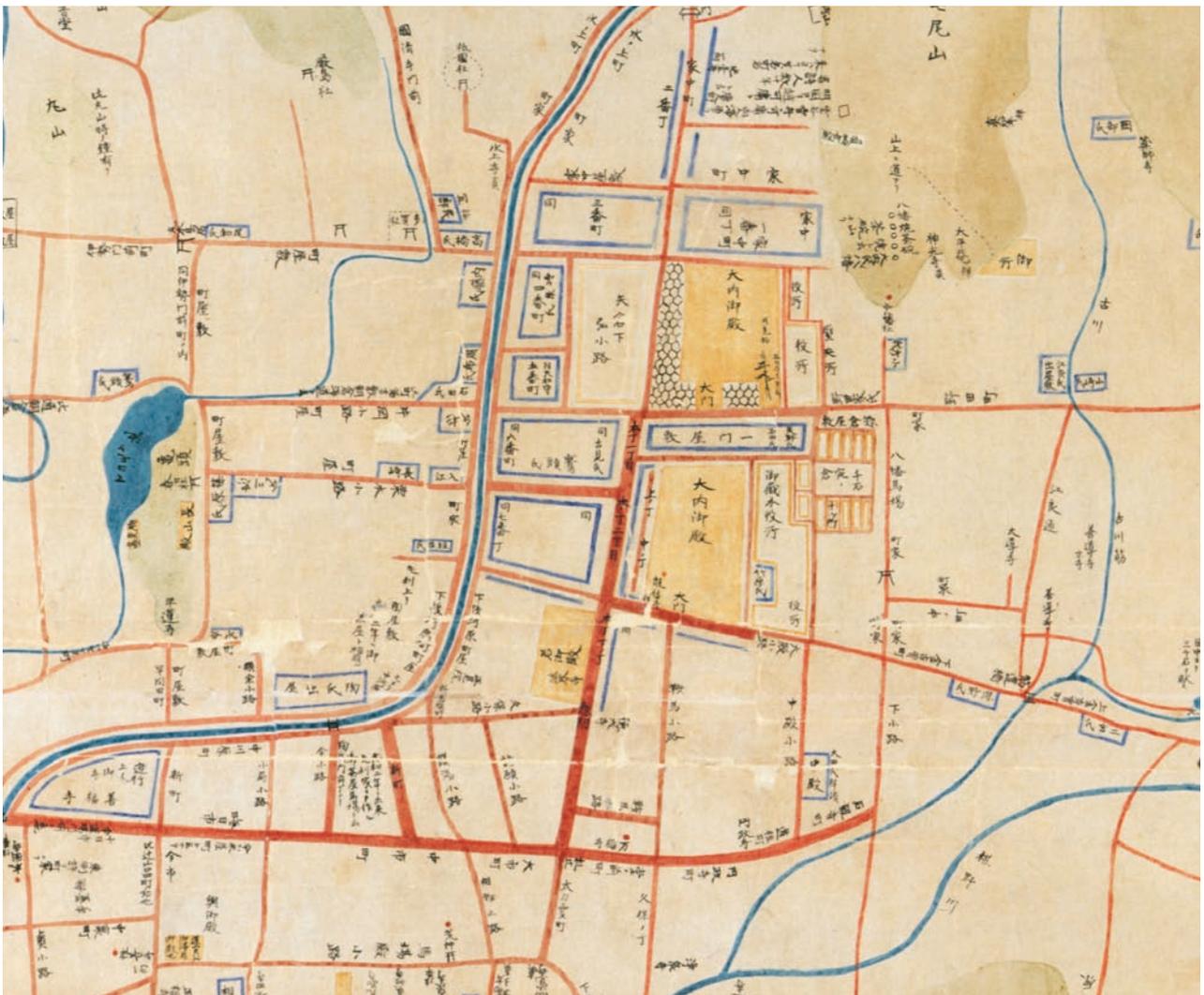


図1 「大内時代山口絵図」(山口県文書館所蔵)

を南北に通じる立（竪）小路の南端札ノ辻と、そこから直角に西に延びる街路が大町であり、当時の繁華街であった。大町には、由緒名望のある町人の屋敷が集中していたが、後に大市、中市、晦日市の三町に分かれ、晦日市は近世初期以降米屋町と呼ばれるようになった。米屋町の西が道場門前町であり、大町に次ぐ町場であった。大市には永正年間（1504－1520年）にはじまるという市夷社があったというので、この辺が古くから市場の中心であったことが推測される（山口市1971：27）。

弘世が居館を山口に移してから、1551年陶隆房の謀反によって大内氏が衰退、滅亡するまでの約200年間、山口は大内氏の本拠地として、軍事面のみでなく経済的、文化的にも著しい発展を遂げた。特に大内義隆（1507－1551年）の時代に山口街は最盛期を迎え、その繁栄ぶりは当時の都である京都を凌ぐほどのものだったという（山口市1961：45）。

当時大内氏の勢力範囲は、国内においては、長門、周防を中心に、石見、安芸、筑前、豊前まで拡大する一方、朝鮮王朝の求めに応じ倭寇鎮圧のために軍勢を派遣するほか、朝鮮や明との間で積極的な交易を進めた。これによって得た莫大な富と強大な軍事力を背景に大内氏は当時日本国内の政治動向を左右するほどの守護大名として成長したのである。また当時の山口の城下には、朝鮮人と明人が二千人余り住んでいたほか、日本に初めてキリスト教を伝えたとされるフランシスコ・ザビエルの布教活動を許可し、後に日本最初の基督教会が創建されるなど、大内氏の外国文化に対する開放的姿勢も伺える。現在山口に残っている社寺や遺跡の多くは、大内時代のもの、又は大内氏ゆかりのものであり、当時の山口の文化的多様性と豊かさを語る貴重な遺産となっている（山口市1961：45－46）。

Ⅱ－2. 大内氏の功績とそのルーツ

山口の歴史を特徴づけるものとして、大内氏のルーツに触れる必要がある。『大内氏実録』によれば、大内氏は琳聖太子という人物を始祖とする。琳聖太子とは、かつて朝鮮半島西南地域に勢力を拡大し、7世紀に滅亡した百済国の王族で、日本に仏経を伝えたとされる聖明王の第三子と伝えられる。大内氏の祖先伝承の中では、琳聖太子が周防国の多々良浜に着岸した後、聖徳太子に謁し、大内県を采邑とし多々良の姓を賜ったとされている。当時大内氏が百済国にルーツを持つと主張したのは、朝鮮半島から大蔵経や寺社造営資本の求請、その他の朝鮮文物を獲得する外交手段の一つであり、「本来の史実とは異なるルーツの喧伝」だとする研究成果（伊藤2005：70）もある。しかし、大内氏が鉄の製錬技術をもって朝鮮半島から帰化した氏族である可能性も否めない。山口市大内御堀にある乗福寺境内に始祖琳聖太子の供養塔が現存するなど、大内氏が朝鮮半島にルーツを持つという伝承は、山口の人々の間で今日でも語り継がれているのである。

天文20年（1551年）に、陶氏の謀反に逢って義隆が自害すると、大内氏は急速に衰退し始めた。1557年最後の当主義長の自害を以て戦国大名としての大内氏は滅亡し、山口街も中世都市としての繁栄に終止符を打つ。後に大内氏の遺業を継いだ毛利氏は萩に築城したため、山口街は一気に田舎町へと転落した。そこから約300年後の文久3年（1863年）ペリーの来航を機に諸外国から開国を迫られる中、尊王攘夷、討幕の旗印を掲げた毛利藩は、藩庁を地の利を得た山口へ移転することとした。山口は、政治的中心、役人の町として再び活気を取り戻し、ここから今日の山口市としての基礎が築き上げられていったのである。

Ⅲ. 七夕ちょうちんまつりの起源

さて、大内盛見（1399～1431年）が先祖の冥福を祈るため、お盆の夜に笹竹の高灯籠に火を灯したのが、後の七夕ちょうちんまつりの起源であると、山口市ふるさとまつり実行委員会によって作成されたパンフレットや冊子など各種のメディアに記されている。この伝説の信ぴょう性を裏付ける資料は今のところ見つかっていない。そのため、七夕ちょうちんまつりは現在、明治期に町おこしのために作られたものだと位置づけられている⁴。しかし、仮に七夕ちょうちんまつりの大内氏起源が伝説だとしても、その歴史的、民俗的依拠はないだろうか。本章では、中世およびそれ以降の盆行事や「七夕」の伝来・受容を通して、七夕

4 2014年6月6日、山口市史編さん室古賀信幸氏のご教示による。

ちょうちんまつりの起源について再考してみる。

Ⅲ－１．上流階級の特権としての盆行事

日本では、お盆に提灯を飾る風習は大内盛見の時代よりはるか前にあった。鎌倉時代の書『明月記』によれば、正治二年（1200年）、安貞元年（1227年）、寛喜元年（1229年）、同二年（1230年）7月14日に、京都で精霊迎えのために高灯籠が用いられていたと記述されている。当時の盆提灯は高灯籠とって、庭先や門口屋根の上に立てた高い竿に付け、精霊を送迎する目印とされていた。ただ、江戸時代に入るまで盆行事の祭祀の対象は、今のように「先祖代々」ではなく、「二親以下」に限定されていたし、盆提灯を用いるのは、天皇家、貴族、武家と僧侶などの上流階級の特権であり、庶民による盆提灯の風習は見られなかった。仏壇とともに盆行事が庶民の間で普及し、さらに、ろうそくの大量生産により、お盆の際にろうそくを灯した提灯が一般的に飾られるようになったのは、江戸時代に入ってからのことである。また、中世では、盆行事は上流階級の間でのみ流行していた。さらに行事の期間についても7月14日と15日を中心に前後1～2日を含む数日間が一般的で、7月1日や7日に盆行事らしきことが行われた記録は残っていない（塩入1997）という。従って、大内盛見が提灯を飾り父母を供養したとすれば、旧暦の7月14日と15日の前後の数日間のことであり、7月7日である可能性は低い。

1842年に萩藩が作った長門、周防両国（山口県）の地誌、『防長風土注進案』の山口街誌の中で、風俗の事の項を見ても、七夕について取り立てて書かれていない。このことから、少なくとも江戸時代末期までは、山口では、旧暦の7月7日あたりに提灯を飾るような他地域と異なる風習はなかったと見てよからう。

Ⅲ－２．「七夕盆」とタナバタ

一方、今日でも、7月7日に、墓地の掃除、盆路作り、井戸さらい、道具磨き（山口県教育委員会2008）など、いわゆる「七日益」の習俗を山口県各地で見ることができる。

五来（1982）や橋浦（1966）など多くの研究者が指摘するところだが、「七日益」は盆行事が上流階級から民間に伝わった際に、同時期に全国各地の集落で行われていた類似の信仰に基づいた秋の祖霊祭、つまりタナバタと習合し、後に祖先祭祀を主とした盆行事として発展したものである。これらの主張によれば、タナバタとは、祭壇の棚に、標識の幡を付けることから由来するものであり、棚も幡も、それぞれ正月の門松や年神棚としめ縄や幣と同様、彼方からやってくる「神」のためにつける標識の一種である。五来や橋浦らは、タナバタは、収穫時期である初秋に農耕感謝と豊作祈願の祭り、つまり祖霊祭であるとする。この文脈において迎えられている「神」とは、祖霊つまり作神なのである。また、「タナバタ」に「七夕」の漢字をあてて読ませるようになったのも、星祭としての七夕⁵が中国から伝来した中世に、文人武士によって牽牛織女の天の川伝説が広まり、タナバタという言葉が織女の棚織と関係するようになってからのことである（橋浦1966：205－206）。

いずれにしても「タナバタ」は、星祭の七夕や仏教行事のお盆が一般庶民に浸透する以前の、農耕を生業とした人々の信仰を反映した秋の行事の一つであったと推測される。本来旧暦の7月15日あたりに行われていた祖先供養を主な内容とするお盆が、その時期も内容も、民間の祖霊祭であるタナバタの祖霊信仰に近いことから、お盆は「タナバタ」と同質な祭祀として行われるようになったのだと考えられる。その中で、秋の祖霊祭としてのタナバタと盆行事、そして星祭である七夕の三つの行事が融合し、一体化した結果、一部の地域で「七日益」が始まったと考えられる⁶。

5 星祭としての七夕、いわゆる「乞巧奠」が平安時代に中国から日本に伝わり、五節句の一つとして武家の行事として行われていた。当初七夕は、庭先で祭壇を設置し、針などを供え、針や裁縫、後には、芸事や書道などの上達を星に祈りをささげていた。江戸時代になって一般庶民の間でも広まり、家々では笹竹を立て、五色の切り紙を飾るなど、特に小さな男児、女児のいる家庭の重要な行事の一つとなった。

6 なお、7月1日が地獄の釜の蓋が開く日で、その日から下旬までを盆の期間中とし、盆踊りや子ども相撲そして地藏盆など様々な行事を行うのは、単に祖先（有縁）だけでなく、無縁や餓鬼などの祓いも目的とされている。日本の盆行事の由来や変遷についてかなり研究の余地が残されており、またの機会に論じることとする。

『防長風土注進案』では、毛利氏時代の陶村⁷の年中行事として、旧暦の7月7日に七夕祭り、盆会・聖霊祭りなどが行われていたと記されている。また陶村の近くにある嘉川村⁸では、7日に墓地の掃除、盆路作り、井戸さらい、道具磨きのほか、新盆のある家庭では高灯籠を掲げる風習とともに、笹竹を立てて子どもの書道など技芸の上達を祈る風習が終戦まで残っていたという。

さらに、上堅小路に居住した小田庄一氏⁹による幼少時代（明治末期から大正初期まで）の回想によれば、七夕祭りの際に、各家庭で昼間は願い事の書いてある短冊や折り紙の鶴などを飾り、夜は、「手作りの提灯で、西瓜を切った形、箱型、南瓜の形など様々なものに加え、さらに走馬灯、岐阜提灯、日の丸の紅提灯など」（小田1979：35）を飾ったというので、当時中心商店街以外の各家庭で行われていた七夕祭は、笹竹の短冊と紅提灯だけに特化したものではなかったことがわかる。

このように、明治期に山口名物となった中心商店街を舞台とする七夕祭とは、当時の山口の民間習俗であった七日盆と星祭の七夕を民俗的素材としつつ、五色の短冊と紅提灯をそのシンボリックな要素として抽出し、「観せる」ための祭りとして構成されていったものであると考えられる。

Ⅳ. 山口「七夕祭」の変遷

七夕祭は、1910年前後、山口実業会（後の商工会議所）によって実行されるようになったと思われるが、実業会成立以前は、商店街の店主らによる自主的な祭りであった可能性が高い。この章では明治期以降の七夕祭の変遷を概観する。

Ⅳ－1. 「山口」の復活と商工会議所

山口は、明治維新を契機として復興への兆しを見せつつあったが、その繁栄策が町の有志者に協議され、具体化されたのは、明治40年（1907年）に山口実業会が結成されて以降である。会員相互の便宜を図るとともに山口商工業の発展に寄与しようという趣旨のもと、当初の会員170～180名は、二代目会長八木宗十郎を推して、まず町の繁栄策として「山口デー」（7月10日より一週間）を提唱した。以来、毎年二回、盆と年の瀬に先立って、中心街の各商店が「連合大売出し」を催し、福引や割引など宣伝に力を入れるようになった。当時では珍しい趣向であったため、山口周辺地域から多くの客を集めた。

その後、山口実業会と並んで、山口工業会が発足した。大正12年（1923年）、両者が合体し、山口商工会と改称した。昭和4年（1929年）市制実施¹⁰とともに、商工会も機構を一新する必要に迫られ、昭和12年（1937年）に山口商工会議所と改められた。会頭には、笠原五郎が就任した。同18年（1943年）には戦時体制下に商工経済会に統合され、山口県商工経済会山口支部に改組したが、終戦後、昭和21年（1946年）に再び山口商工会議所に復称した（山口市1961：60－61）。

Ⅳ－2. 明治から昭和初期までの七夕祭

資料で確認できる七夕祭に関する最も早い記事は、『防長新聞』明治18年（1885年）8月18日付け第191号に「七夕」と題するものであり、そこから当時の七夕祭の様子をうかがうことができる。

一昨夜は旧暦七夕なれば当所には例年の通り軒別に七夕竹を立て昼は短冊（でも一二丈ある）の風に翻る銀河の流れかと思われしも夜の提灯は中々以て銀河の星の数所ではない。一本の笹は多くて百五十少くも三十に下らぬ提灯を釣したれば其奇観はこれはこれとはとも言われず只口を開いて眺むる計りなりし。

この記事に依ると、明治初期の山口では、旧暦の7月7日になると、昼には各家（店）の前で七夕竹を立

7 山口県吉敷郡南東部に位置し、当時は鑄銭司村が含まれていた。1944年山口市などとの新設合併により廃止。

8 山口県吉敷郡南東部に位置し、1944年山口市など新設合併により廃止。2014年6月に実施した山口嘉川出身の郷土史家杉山正実氏に対する聞き取り調査による。

9 1979年、山口市制50周年記念に際し、『市民がつづるふるさとの今昔』が山口市中央公民館によって編集・刊行された。当時78歳の小田氏も、幼少時代の上堅小路の夏祭りについて寄稿した。

10 山口町と吉敷村の合併による市制の実施。これにより、山口市が誕生した。

て長い短冊を飾り、夜には笹に30から150ぐらいの提灯を吊るしていたというから、後の七夕ちょうちんまつりの原型がすでにこの時にあったと見て良い。しかし、明治後半になると、名物の七夕祭は年々衰退していくなか、明治43年（1910年）、山口実業会は、七夕祭を従前通りに存続させること、祭事の日をちを一か月遅らせて8月7日に改めること¹¹にした（『防長新聞』明治43年8月6日付け）。祭りの衰退を阻止しようと山口実業会に私財を寄付した篤志家もいた（『防長新聞』大正8年8月9日付け）。しかしそれにも関わらず、「昔より提灯を掲げる家数も減り同じ家でも提灯の数も減ってあるといふ有様で、昔の盛況を見る事はできなかつた」（『防長新聞』大正14年8月9日付け）。

昭和2年（1927年）より、七夕祭の復興策として七夕祭の夜、各家（店）で飾られる提灯の実況を審査し、山口町から奨励金を交付すること、山口商工会主催で選賞会を催し優秀なるものから、一等から五等までの賞金を与えるなど（『防長新聞』昭和2年7月30日付け）、様々な取り組みが行われた。山口記者団二六俱樂部が審査に臨んだその年の8月7日、山口は「五彩の色紙で飾った笹竹のトンネル（夜8時になると）忽ち紅灯萬点の海と化す復活した山口七夕祭の美観」（『防長新聞』昭和2年8月8日付け）を呈していた。さらに、昭和4年（1929年）は、山口市制後の一回目の七夕祭であり、全市民の意気込みを反映した盛観を見せた。「二十萬の紅灯 全市火の海と化す 美観の第一位は下豎小路下組 八木呉服店は個人賞の第一等」（『防長新聞』昭和4年8月9日付け）とあるように、七夕祭は、再び「山口名物」の名にふさわしい行事となったのである。

日中戦争勃発後（遅くとも1940年より）、七夕祭は中止となった。

Ⅳ-3. 戦後の七夕祭

昭和25年（1950年）に、商工会議所によって七夕祭が復活され、1953年より8月6、7日の2日間開催となった。6日は、竹竿に長い短冊をぶら下げる短冊祭で、7日の夜は、提灯が一斉に点灯されるという内容であった。さらに、1960年は、8月5、6、7日3日間にわたって開催された。5日と6日は短冊祭で、7日の夜に提灯が点灯された。この年は高校総体が山口で開催されたため、11日の夜にも提灯が点灯された。1969年、祭りの模様がテレビで生放送され、山口の七夕祭の知名度がさらに上がった。

1970年代半ばごろまでは、七夕祭期間中は中心商店街のみでなく、豎小路あたりも短冊と紅提灯で飾られており、大勢の観客で賑わっていた¹²。当時を知る山口の出身者に聞き取りをすると、少なくとも昭和40年頃までは、中心商店街もさることながら、築山神社・八坂神社を札ノ辻に繋げる豎小路は、道がやや斜面になっていることもあり、提灯トンネルが最も美しく、人出も出店も多かったと、そのにぎやかさを懐かしむ声が多かった。

1979年、山口市、山口市観光協会（後に山口観光コンベンション協会）と山口商工会議所の三者によって山口市ふるさとまつり実行委員会¹³（初代委員長山口観光協会会長竹原哲夫氏、以下実行委員会）が組織され、7月20-27日に行われる山口祇園祭に合わせて、22~24日の三日間、第一回ふるさとまつりが実施された。22日には国道9号線日赤口交差点から市民会館交差点までの1.3キロの間で市民パレードが実施さ



写真1 昭和39年頃の七夕祭 中心商店街屋間各店頭にて飾られた短冊（山口市ふるさとまつり実行委員会）HPより

11 日本では、明治6年（1873年）に太陽暦（新暦）が導入されたが、民間の祭事はしばらくの間、陰暦に従って行われていたようである。山口の七夕祭もこうして1910年にはじめて新暦に従い、月遅れの8月7日に行われることになった。

12 VI-2の項をご参照。

13 設立以来、七夕ちょうちんまつりの企画・実行に当たっている。事務局は当初、山口商工会議所に設置されたが、平成9年に、山口観光コンベンション協会に事務局が移管し、平成25年に再び商工会議所に戻った。



写真2 山口中心商店街ろうそくを灯した提灯トンネル、2015年筆者撮影

れ、22～23日の2日間には、市役所前庭をメイン会場として、山口県郷土芸能大会、24日には、ちょうちん踊り（1981年に山口祇園踊りに名称変更）が開催された。このほかに、山口商工会議所企画広報委員会（当時の委員長北條栄一氏）の企画により、市民パレードの最後尾に朝鮮通信使、大内や室町時代、戦国時代の服装を身にまとった約150名の商店街経営者による「大内時代行列」が実施され、約7万人の観衆が集まった（『中国新聞』、昭和53年7月23日付）。ちなみに、この大内時代行列を契機に大内太鼓保存会を発足させたが、資金や人手不足により、

大内時代行列は2000年前後に中止となった。

1979年、第一回ふるさとまつりの内容を継続する形で、8月5、6、7日に七夕祭が実施され、6、7日の2日間は提灯が点灯された。また、この年から「七夕祭」が「七夕ちょうちんまつり」へと名称変更された。1980年より、開催期間が8月6、7日に短縮され、同時に山鉦が40年ぶりに山口青年会議所によって復活された。パークロードに大提灯が設置されたのもこの年である。1981年に、山口観光協会が創設30周年記念として「ミス山口コンテスト」が、1982年に、山口商工会議所青年部¹⁴によって「山口娘ゆかた姿コンテスト」が開催された。さらに1983年には、山笠とすだれ提灯、子どもみこしパレード（山口商工会議所2008：142-144）、1999年にはサマーマスクちょうちんツリー¹⁵作成など、この時期から、新たな要素を盛り込んだ取り組みが次から次へと行われるようになり、七夕ちょうちんまつりは、山口市のまちづくりとともに現代的な都市祭りとして変容していったのである。

IV-4. 今日の七夕ちょうちんまつりと今後の理想像

2000年あたりに、昼間に飾られた笹竹の短冊は、手間がかかるとの理由から中止した。以来、七夕ちょうちんまつりは、その名の通り「ちょうちん」のみがテーマとなり、イベントも主に夕方以降に集中するようになった。夜に、丸い赤提灯にろうそくを一斉に点灯し、燃え尽きるまでの凡そ2時間は、商店街を中心とした一帯は「紅灯萬点の海」と化し、独特な雰囲気醸し出すことは従来通りである。また、「大内氏の懿徳を慕う」（山口市1971：528）がために「静的」であり続けてきた商店街と対照的に、新たな会場となったパークロードなどでは「動的」イベントが次から次へと企画され、大殿地区や湯田地区にもつながる、より広範な地域にまで拡大されようとしている。

現在、祭り期間中20万人弱の観客を動員しているが、将来的には100万人の集客数と100億円の経済効果を目指している。また、九州など近隣地域の祭りの成功例を参考に、踊りや音楽、そして花火などを盛り込んだ、「観せる」ための祭りを到達モデルとしている¹⁶。毎年山口市からの補助金と企業の寄付金を背景に、安定した祭りの実行組織が担保され、大勢の観客を動員するヒト、モノ、カネに余裕もあるため、七夕

14 山口商工会議所青年部は1978年に山口商工会議所内に設立された。現在会員はおよそ100名。成立当初から、商工会議所が実行する七夕祭を手伝っていたが、平成19年より、「もっとちょうちんプロジェクト」（既存の中心商店街会場を、湯田温泉街などつなぎ、ちょうちんを増やし、祭りの規模と影響力を拡大する事業）を企画するなど、本格的にちょうちん祭りに取り組み、実行委員会をけん引している。

15 商工会議所青年部設立20周年記念事業として始められた「日本のクリスマスは山口から」事業の一環である。当事業は、大内氏が1551年に山口に再来山したサビエルにキリスト教の布教を許したことから、1552年に神父トルレスらによって日本で初めてクリスマスが祝われたという史実に基づいている（山口商工会議所2008：191）。

16 山口商工会議所青年部平成23年5月度例会資料による（2011年5月17日付）。

ちょうちんまつりは、今後も山口市の観光事業を支える重要な行事の一つとして、順調に発展していくことが期待されている。

一方、七夕ちょうちんまつりの起源とされる「大内氏の祖先供養」説は、「スル」当事者にも「ミル」観客にもそれほど重要な情報ではなくなっている。こうした中で、「地縁の復活」や「地域文化の保存」を目的に、大内氏との歴史的、宗教的関連性に注目した七夕ちょうちんまつりの「分化」が現れている。

表1 2014年度七夕ちょうちんまつり日程（8月6～7日）

	イベント	会場	開催時間
6日	ちょうちん笹飾り	商店街	19:30-22:00
	ちょうちん笹飾り	豎小路	19:00-21:30
	ちょうちんツリー	市役所前庭	19:00-21:30
	つながる大殿ちょうちんの灯	八坂神社・豎小路	18:00-20:30
	新山笠・提灯神輿巡行	県道204号線・パークロード	20:00-21:00
	yab舞楽祭2014	新亀山公園ふれあい広場	18:00-21:30
	県警音楽隊	パークロード	18:30-19:00
	レストコーナー	新亀山公園ふれあい広場	18:00-21:30
7日	カーコーナー	パークロード	18:00-21:30
	ちょうちん笹飾り	商店街・湯田温泉	19:30-22:00 (湯田温泉は21:30まで)
	ちょうちん笹飾り	豎小路	19:00-21:30
	ミニちょうちんツリー	パークロード	18:30-21:30
	ミニちょうちんツリー	駅通り・商工会議所・湯田温泉・錦川通り	19:00-21:30
	すだれちょうちん	パークロード	19:30-21:30
	新山笠飾り	パークロード	19:00-21:30
	DANCE WAVE MINAKOI のんた	新亀山公園ふれあい広場	17:30-21:45
	レストコーナー	新亀山公園ふれあい広場	18:00-21:30
	カーコーナー	パークロード	18:30-21:30
レトロカーコーナー	市役所前庭	18:30-21:30	

表1 出典：山口ふるさとまつり実行委員会パンフレットに基づき筆者作成

V. 手作りちょうちんまつりと「地縁の復活」

まずは、大内氏が城下町として築いた山口のかつての中心地に当たる大殿地区にある、おおどのコミュニティ協議会による取り組みを見てみる。

V-1. おおどのコミュニティ協議会の発足

おおどのコミュニティ協議会は「協働のまちづくり」というスローガンのもとで、平成21年に立ち上げられた。協働のまちづくりが必要となった背景について、おおどのコミュニティ協議会の資料では、人口の減少や少子高齢化社会、価値観の変化（公共、暮らし、豊かさ）と地方分権の進展（国から地方へ権限と財源の移行）という社会情勢が変化していく中、その対応策として、行政だけでなく、地域住民も主体となつともまちづくりを担っていく必要がある¹⁷、と説明している。地方分権に関しては、平成18年12月に「地方分権改革推進法の成立」によって、地方に対する規制緩和や国から地方への事務、権限の委譲が進展している中で、山口市においても『山口市協働のまちづくり条例』が平成21年4月に施行された。これを受け、大殿地区では、町内連合会理事会が準備会を立ち上げ、また平成21年6月13日の総会をもって、おおどのコミュニティ協議会が正式に設立されたのである（以下、協議会と略す）。

協議会の事務所は、大殿地域交流センター内に設置されている。組織としては、町内連合会や青少年健全育成連絡協議会など大殿地区にある17団体を包括するが、あんぜん部会、やすらぎ部会とにぎわい部会の三つの部会に分かれ、それぞれ地域の課題解決の業務を分担している。その中で、地域交流（祭り）や伝統行

17 おおどのコミュニティ協議会、2015年6月8日に開催された第二回拡大運営委員会の議事録により。

事、文化の振興などに関することを担当業務としているのが、にぎわい部会である¹⁸。協議会のメイン事業の一つは、毎年山口市ふるさとまつり実行委員会が主催する8月6～7日の山口七夕ちょうちんまつりに合わせた形で行う「つながる大殿七夕ちょうちんの灯」事業であり、にぎわい部会が主な企画を担当するが、全般の運営については実行委員会体制で行っている。

V-2. 大殿地区のちょうちんの灯の内容

2015年度の事業では、資材の調達から祭りの実施までのスケジュールと各部会の担当などは、表2と表3の通りである。

表2 2015年 つながる大殿七夕ちょうちんの灯実行委員会組織図と役割分担

◆各部隊 (大殿 M/T/K)	(総務で) 見守り隊・M	(催しで) 楽しませ隊・T	(提灯で) 飾り隊・K
◆実行委員長：岡野公紀	隊長：内山 秋久	隊長：瀬戸 宏一郎	隊長：砂井 昭
◆主な役割	全体調整	イベントの企画経営	ちょうちん全体の設置計画
	広報・予算計画	他団体との連絡調整	配布や撤収に関する調整
◆所属団体 (案) <連携団体> 大殿小学校／大殿中学校 OTK/野田学園 祇園囃子保存会・おはなし チェリーズ 山口観光コンベンション協 会/山口市地域応援隊など	●大殿地区社協 ●大殿地区老人クラブ ●民生委員児童委員協議会 ●大殿地区体育委員会 ●大殿地区消防後援会 大殿小路まち・ひとNW	●大殿地区青少協 ●子ども会育成連絡協議会 ●大殿春秋会 ●大殿中学校PTA ●大殿小学校PTA ●山口まちづくりセンター	●大殿地区町内連合会 ●大殿ホテルを守る会 ●安心のまちづくり委員会 ●アートふる山口実行委員 会 ●人権学習推進委員会

表2 出典：おおどのコミュニティ協議会2015年6月8日運営委員会資料

上記の表からわかるように、竹の伐りだしやちょうちん、ろうそくの仕分け・配達作業などの事前準備から当日八坂神社でのちょうちんまつりの取り付け作業、祭りのあとの竹やちょうちんの回収・修繕まで、すべて地域住民の手によって行われる。また、将来の地域の担い手として、子どもたちには、火起しの儀への参列、火入れサポーター体験、子ども学習会、ミニ縁日などを通じて、地域の文化を知り、事業に親しんでもらおうとしている。

2015年度の学習会には、40名の親子のほか、地域住民47名がスタッフとして参加した。6日の火入れサポーターとして参加した親子は134人で、スタッフは76名だった。ちなみにこれらの作業に先駆けて、午後3時に始まった八坂神社でのちょうちん設営（竹枝にちょうちんを取り付ける作業）には、協議会のスタッフに加えて大殿中学校OTK¹⁹の生徒36数名が参加し、作業を手伝った。

現在の運営方法は、2009年協議会設立以来、試行錯誤を重ねてきた過程における現時点での成果である。最初の二回は、大内氏ゆかりの国宝五重塔²⁰がメイン会場となり、そこで火起しの儀を行った後に、公家装束をまとった人たちによる琴や尺八、太鼓の音をバックに、願いの込められたちょうちんの灯を八坂神社や、豎小路筋、後河原筋に広げようとした。イベント性が強く、観客を集めやすい利点もある一方、会場が分散しすぎて人手が集まらない問題が生じた。三年目より、事業の原点となる「地縁の復活」に戻り、持続できる方法を議論した結果、八坂神社を会場とする現在のやり方に定着した。2014年は台風のため中止となったが、六回目である2015年の時点では、作業を通じて、ふだん全く接点のない人々が互いに交流ができるようになり、「大殿のちょうちん」の知名度も少しずつ上がっているようである²¹。

18 あんぜん部会は、文字通り安心安全な生活や環境づくり、自主防災などに関する事、やすらぎ部会は、健康の増進や福祉の向上、子どもの健全育成や子育て支援などに関する事を担当する。

19 大殿 (Odono) の地域(Tiiki)に貢献 (Kouken) したい、のイニシャル。

20 応永6 (1399) 年に、応永の乱で命を落とした義弘の菩提を弔うために、弟の盛見が計画し、嘉吉2年 (1442年) に完成したと言われている。屋根が檜皮葺となっており、大内時代の最高傑作とされている。山口市香山町瑠璃光寺境内にある。

21 2015年6月30日に行われた事務局長寶川好子氏へのインタビューおよび、7月6日、8月3日、9月7日の協議会運営委員会への筆者の参加・観察結果による。

表3 つながる大殿七夕ちょうちんの灯の年間スケジュール

3月～6月ごろ	地域内の竹林から、ちょうちんを支える竹枝を伐採				
6月	実行委員会を立ち上げ、飾り隊、楽しませ隊、見守り隊に分かれて、協議・運営開始				
8月2日(日)	13:00～地域歴史学習会、14:30～ちょうちん配布作業				
イベント当日のスケジュール(8月6日(木))	■スタッフ集合時間：15:00 集合場所：八坂神社(旧河村写真館前)→各隊ごとに作業				
	時間	全体スケジュール	伝承センター(室内)	伝承センター(屋外)	八坂神社
	18:20	火入れサポーター集合		○縁日会場の設営	○ちょうちん設置
	18:30	観光コンベンション協会：御霊なごめ祭り		○縁日資材の準備	○火起しの儀準備
	18:40	火起しの儀見学			○火起しの儀開始
	19:00	全域ちょうちん点灯	○和コンサート開始	○縁日開始	○分灯・火入れ開始
		イベント開始	①野田学園箏曲部		
	19:30		②箏玲会		
	20:00		③祇園囃子保存会	○縁日終了	
	20:30		○和コンサート会場片づけ	○縁日会場撤収	
21:00	ちょうちん消灯準備開始			ちょうちん消灯準備開始	
21:30	全域ちょうちん消灯			ちょうちん消灯・撤収	
22:00	終りのあいさつ				
8月7日(金)	各町内の「大殿七夕ちょうちん」の点灯 19:00～21:30				
8月8日(土)	「大殿七夕ちょうちん回収」「整理・仕分け」終了後「お疲れさま会」 集合時間：15:00 集合場所：大殿地域交流センター				

表3 出典：おおどのコミュニティ協議会2015年7月6日運営委員会資料

V-3. 「手作りのお祭り」による地縁復活

「つながる大殿七夕ちょうちんの灯」事業の特徴は、地域住民による共同作業（お祭りの企画・準備・実行）を通して、地域住民間の理解と交流を深め、新たな繋がりを構築すると同時に、地域の歴史や文化への理解も深めることである。まさに、当該事業が掲げている「地縁の復活」と「地域の伝統文化を次世代につなぐ」という目的そのものである。竹元が唱えるように、バブル崩壊後、人々は何に帰属先をもとめればいいのかという「帰属先の揺らぎ」問題に直面する中で、地域社会は一つの帰属先として想定され、「存在論的不安を解消するための再埋め込み



写真3 八坂神社にておおどのコミュニティ協議会のスタッフと大殿中学校OTKの生徒による提灯取り付け作業。2015年8月6日、筆者撮影

の可能性を探求する現代コミュニティ論が要請され」た。その新たな探求に役立つのが、地方都市の住民による自発な地域活動である（竹元2014：346）。大殿地区の「つながる大殿ちょうちんの灯」事業は、山口市によるまちづくり政策の一環であり、竹元のいう純粋な地域住民主導のものではないが、その着目点は地域住民の連帯強化と自発的地域作りにあることから、日本の多くの地域同様、祭りを通して地域の再生を図る一事例となろう。プライバシー保護を重視する都市住民の生活スタイルが変わらない限り、従来の地縁そのままの復活は困難であろうが、地域全体の連帯を強化し、都市住民にとっての新たな帰属先、アイデンティティの拠り所としての「地域」が生まれることが期待される。

Ⅵ. 築山神社における「御霊なごめ祭」と地域文化財の保存

七夕ちょうちんまつりの流用例としても一つ挙げられるのが、2012年8月7日より築山神社において、山口観光コンベンション協会の主導で復活した大内氏歴代御霊なごめ祭である。2015年8月には4回目を行ったばかりで地域での認知度はまだ低い、祭りと地域文化の構築の関連性を考える上で極めて興味深い動きである。

Ⅵ－１. 築山神社の歴史

築山神社と八坂神社の境内及びその隣接地一帯は、28代目教弘（1420～1465年）が生前居館の北側に、別邸として建造した築山の館の跡地である。築山館は大内氏の私生活を営む場所として建立されると、それ以前の居館はもっぱら政務を行う場所となった。教弘の子である政弘の時に、ときの著名な連歌師宗祇による築山館の林泉（池）を詠んだ詩²²は殊に有名であり、「この築山館こそ山口文化の源泉であった」とも評されている（山口市1982：160-161）。なお、この海に譬えられた築山館の池は、天明2、3年（1782、1783）年頃までその輪郭がわかる程度に残存していたという（山口市1982：258）が、現在の発掘調査ではその詳細は明らかではない（山口市2010：938-944）。

寛正6年（1465年）に教弘が亡くなったあと、築山館の西北隅、現在の築山神社の地に築山祠が建てられ、教弘を祀った。長享元年（1487年）年4月3日、後土御門天皇は築山祠に築山大明神の宣旨を賜り、政弘はこれを築山祠に奉告した。慶長10年（1605年）、毛利輝元は義隆を祭神として、当時すでに廃れた築山大明神の旧址に宝現霊社を創建した。義隆の嫡男義尊をはじめとして、大寧寺の変で殉難した家臣、諸卿合わせて28名の霊をこれに配祀した。のちにいったん龍福寺境内に移るが、文政11年（1828年）に字片岡に、さらに明治2年（1869年）に現在地に移り、翌年築山神社と改称された。その際、大内氷上興隆寺境内に建てられた、徳川家康を祀る東照宮の社殿を移設したため、徳川家康も合祀されている。

Ⅵ－２. 築山神社臨時大祭と七夕祭

築山神社は、もともと多賀神社の旧境内に創建した宝現霊社に由来するものであったため、一連の神事は多賀神社の宮司である高橋家によって執り行われてきた。明治時代になると、後継者不足のため、今八幡宮宮司家第15代の霊宮司小方登一（業次）氏（1873～1926年）が、兼務の形で受け持つことになった。築山神社では、その祭神の霊を鎮めるための例祭（11月5日前後）以外、1933年から少なくとも終戦まで山口七夕祭の期間に「臨時大祭」（「大内祭」とも）が行われていた。

『防長新聞』昭和8年（1933年）7月20日付けの「山口名物七夕祭を今年特に盛大に行ふ 築山神社臨時大祭を執行 立（豎）小路一帯を灯の海とする」と題する記事によれば、築山神社臨時大祭は、最初は山口市東部の町おこし策として七夕祭に合わせた形で8月7日に行われたという。人を集めるために、臨時大祭の余興として活動写真の無料公開、福引、宝探しなど様々な企画も盛り込まれていた。七夕祭に下豎小路全体が一斉に紅提灯を飾り、豎小路は札の辻から築山神社までが提灯を飾るようになったのは、この時期からだと考えられる。

さらに、同新聞昭和10年（1935年）8月5日付けの記事によれば、「築山神社敬神会主催山口商工会後援にて六、七両日同大祭を盛大に執行することとなり」、境内で活動写真の奉納のほか、市内四小学校の800人以上の生徒による清書灯籠も奉納された。7日午前11時に祭典が執行され、「祝詞の声朗かに皇国の安泰と大山口の発展が祈願され」という。昭和16年（1941年）8月6日付けの同新聞には、「都の京に次ぐ燦然たる文化をなした大内義隆山口卿を祀る県社築山神社大内祭垂国威宣揚式武運長久祈願祭は来る七日午後六時から崇敬者総代世話人多数参列執行される」との記事があり、「七夕祭は昨年同様取りやめ、神社境内で各国民学校児童奉納の幾百と云ふ掛アンドンを吊るしこれに点火…」の内容から、遅くとも1940年より七夕祭が中止となったこと、築山神社では、特殊な歴史的状況下に「国威宣揚」や「武運長久」の祈願など、

22 「池は海こずぬは夏の深山かな」と「色ふかき木の葉の庭にちりもなし」の二首が『老葉』に収録されている。

趣旨が従来の七夕祭とはやや異なる祭りが行なわれていたことが伺われる。

戦後七夕祭が復活された際には築山神社での神事も復活されたかどうかは定かではないが、堅小路とその周辺は、紅提灯が飾られ、屋台も多く出されており、大変賑わっていたという。実際、前述の大殿地区で実践されている「つながる大殿七夕ちょうちんの灯」事業の企画・実行に際し、主導的役割を担う者の中に、この時期の紅提灯で飾られていた堅小路の風景を幼少期の記憶として持っている地元出身者が少なくない。

VI-3. 朝鮮人労働者と築山神社の盛衰

山口県は、下関と釜山を結ぶ連絡船があるため、全国でも有数の朝鮮人居住区であった。その中でも、炭鉱都市である宇部に労働者として動員されてきた朝鮮人の存在が目立っていた。築山神社も、戦前炭鉱で働くこうした朝鮮人労働者と密接な関係をもっていた。今八幡宮前宮司小方基次氏によれば、昭和10年代（1930年代）、築山神社の例祭（11月5日前後）に合わせて、山口県内、特に宇部の炭鉱で働く朝鮮系の人々が集まり、屋台を出したり、朝鮮相撲も行ったり、神社境内とその周辺は大変賑わっていたという²³。

終戦直前の昭和20年には、宇部の炭鉱労働者全体の44%を占める外国人労働者1万4千人のうち、1万2千人が朝鮮人労働者であった（宇部石炭支局1969：表110、表25）。これらの朝鮮人を会員とする山口県協和会が1940年に結成され、県下の警察署単位に各支部が置かれたが、皇民化を図るための定期的な協議会の開催や日本人化教育が徹底された（宇部市1993：670-674）。一方、彼らの普段の暮らしに関しては、「若い人や家族が200～300人ほど群がって炭鉱のある海岸の近くに住んで」おり、「中には不足する食糧や野菜を分けてほしいと近所を尋ねることも多々あるものの、朝鮮出身労働者は危険視・度外視され、村から敬遠されていた」という（李（他）2008：111）。

日本人化教育を受けていた朝鮮人は朝鮮相撲などは禁止されていた。従って、築山神社で朝鮮相撲を行ったとなると、当時朝鮮人の例祭への参加は「皇民化教育」の一環ではなく、彼らによる自主的なものと推測できる。朝鮮にルーツを持つとされる大内氏ゆかりの築山神社は、こうした朝鮮人同士が親睦を深める場、そして心の拠り所として篤い信仰を寄せられており、一時期の繁栄を見せていたのである。

終戦後、これらの朝鮮人労働者の大半は帰国した。日本での生活を選んだ少数の朝鮮人も、いつしか日本社会に溶け込み、築山神社への信仰も希薄となっていった。築山神社は現在崇敬者が少なく、ほぼ無収入の状態が続く中、建物の破損や老朽化が進み、その存続すら危うくなっている。山口に生まれ育ち、山口の歴史や文化に関心を持つ一部の有識者の中に、大内ゆかりの築山神社が持つ地域資源としての価値を生かすべきだと唱える者も少なくない²⁴。しかし、人手や資金面での問題が多く、実際の取り組みが殆どなされていないのも実情である。

VI-4. 大内歴代御霊なごめ祭の内容と意義

2012年8月7日18時頃、築山神社前に祭壇が設けられ、商店街の紅提灯と同じものが祭壇の両側に飾られ、山口観光コンベンション協会やおおどのコミュニティ協議会及び山口市の関係者が参列する中、一回目のなごめ祭^{おおうち}が執り行なわれた。2014年より、大内氏の慰霊にふさわしい荘厳な雰囲気^{おおうち}を醸し出すべく、「大内菱^{びし}」と称される家紋がついた白い高張提灯を二つ飾ることになった。昭和初期と思われる堅小路の両側に縦長の白い提灯が飾られていたことが現存の資料から確認され、それを依拠して、この高張提灯が復元されたと考えられる²⁵。

祭祀自体は20分ほどで終了するが、その後、隣の八坂神社で火起しの儀が行われる。火起しの儀は、前述のとおり、「つながる大殿七夕ちょうちんの灯」事業の一つであるが、二つの儀式をつなげるのは、同じ大

23 2015年11月16日小方基次氏への電話インタビューによる。

24 たとえば、柴田病院院長柴田眼治氏による「築山神社—その復興を願って」（『鴻城鎮護』第4号（平成22年5月）掲載）、地元の写真家栗林和彦「今八幡宮と僕」（同第7号（平成24年1月）掲載）の中でも、築山神社で大内義隆と殉死した28人の家臣に、徳川家康も祀られているという史実を指摘し、その歴史的価値の活用を唱えた。

25 2015年6月山口観光コンベンション協会鈴木克彦氏の教示及びご提供資料による。

内氏ゆかりのイベントとして、なごめ祭りをいずれ大殿地区の住民によって担ってもらうという狙いがあるからである。それまでには、コンベンション協会の一般事業費より醸出される経費によって行われるという。

なごめ祭の復活に伴い、老朽化した築山神社の修築も課題として浮上している。築山神社に使われる檜材は、現在日本では入手が困難な貴重なものである。雨漏りのする屋根等を修復すれば、あと数十年持つとみられるが、修理には莫大な費用が必要である。大殿地域には価値のある歴史的建築物はほかにも多数あり、築山神社は自治体の指定を経て、国指定の文化財になるまでの道程はかなり長いと思われる²⁶。現在、神社の存続や修築について、地域住民の意見がまとまっていない段階であり、結論が出るまでしばらく時間がかかるようである。しかし、大殿地区の住民が「手作り」の提灯祭りを通して地縁を復活しようとする動きの中であって、築山神社で復活された大内氏歴代御霊なごめ祭の意義は大きい。それは、「なごめ祭（慰霊）」という祭祀を復活することによって、「七夕ちょうちんまつり」＝「鎮魂」＝「大内氏」＝「築山神社」という図式で、地元の人々に、「築山神社」が持つ歴史的、文化的価値を認識してもらい、それを地域の文化財として保存・活用するよう導こうとする重要な試みなのである。



写真4 2014年に復元された大内氏の家紋（「大内菱」）のある提灯。2015年8月7日築山神社にて、筆者撮影

VII. 地方都市と祝祭「山口七夕ちょうちんまつり」の役割

本稿では、山口七夕ちょうちんまつりの起源、変遷、及び今日の様々な状況について述べてきた。大内氏による先祖供養に起源をもつとされる七夕ちょうちんまつりは、明治初期前後、山口の人々によって新たに作られた行事である可能性が高いものの、単なる商業的「創作」ではなく、民間信仰である祖霊祭のタナバタに、中国から伝来した祖先供養の盆行事と星祭の七夕が融合した当時の民間習俗を基盤としたものであることは明らかとなった。

また、都市祭りとしての山口七夕ちょうちんまつりの発展やその流用として、地縁の復活と地域文化の活用を狙った新たな取り組みについて考察し、地方都市における祭りの進化と分化の論を試みた。

即ち、山口七夕ちょうちんまつりは都市祭りとして、戦後地方都市である山口の発展とともに変容を遂げてきた。戦後いったん復活した七夕祭は、高度経済成長期がもたらす人々のモノへの関心の過度集中や大都会への人口流出による人手不足などにより衰退した。1973年のオイルショック以降、都市の発展は「モノの時代」から「こころの時代」へと方向転換するなか、山口では七夕ちょうちんまつりの企画・実行組織としてふるさとまつり実行委員会が設立された。さらに、1987年第四回全国総合開発計画（四全総）では、多極型分散国土の形成を目標とし、そのために「個性豊かな地域づくりの推進」が必要であるとし、その手段の一つとしてイベントの活用を具体的な施策として掲げた。以来、「地域の活性化」の使命を背負いながら、七夕ちょうちんまつりは益々新たな企画を盛り込んだイベントと化していったのである。

七夕ちょうちんまつりの進化過程は、同じく山口の三大祭りである祇園祭と天神祭とを比べてみても一目瞭然である。米山が指摘するように、「政教分離」が日本国憲法に明記されている今日の日本においては、伝統行事の持つ宗教性は祭りを推進する側にとってマイナス要因になりやすく、一步誤れば、国家や地方自治体が「憲法違反」としてその行為が追求される（米山1986：185）。そのため、かつて「神」がともにあるからこそ、街を賑わわせていた祇園祭や天神祭は、現在人口の流出や少子高齢化、地縁の希薄化によって、資金や担い手不足などに陥り、その存続すら懸念されている。その規模においても、集客数や経済効果にお

26 2015年11月11日、今八幡宮宮司小方礼次氏の教示による。

いても今後さらなる期待ができる七夕ちょうちんまつりとは好対照である。

一方、地方自治体など行政の側からすれば、様々な施策を遂行する際に、地縁的な単位組織が整っていることが望ましい。1970年代に唱えられた「地方の時代」、「文化の時代」のキャッチフレーズに反映される、地方と文化をもって都市化社会がもたらす諸問題を解決しようとする国策は、後に地方分権という形で受け継がれ、おおどのコミュニティ協議会の「つながる大殿七夕ちょうちんの灯」事業のようなスタイルで具現化されていった。七夕ちょうちんまつりが地縁復活のツールとして選ばれた理由は、皮肉にも七夕ちょうちんまつりが都市祭りとして進化した過程で色褪せた大内氏と地域との歴史的結びつきである。祭りの企画、準備そして実行を通じて、「大内氏」が持つ歴史的、文化的意義を再認識すると同時に、それを軸としたある種の「共同体」意識が生まれ、地域の連帯感を高めることが意図されているのである。2012年に観光コンベンション協会の主催によって復活した大内歴代御霊なごめ祭も、七夕ちょうちんまつりが持つ大内氏との縁を強調する形をとった行事であり、住民の自らの力による地域資源の保存・活用を目指したものであると捉えることが出来よう。

グローバル化の波が地方にも押し寄せている中、大勢の外国人旅行者が中小都市にも流れ込むことが予想されている。「日本らしさ」はもちろんのこと、「地方」の特色を前面的に打ち出すためには、その地方特有の宗教性と歴史性を訴える「まつり」は、最も有効な手段の一つとなろう。地方都市における祭りの今後の動きも、引き続き注目すべきであろう。

謝 辞

本稿は、山口商工会議所事務局長飯田裕史氏、今八幡宮（兼築山神社、八坂神社）宮司小方礼次氏、同前宮司小方基次氏、大殿ホタルを守る会事務局長岡田勝栄氏、山口市総合政策部文化政策課市史編さん室古賀信幸氏、柴田病院院長柴田眼治氏、山口観光コンベンション協会専務理事鈴木克彦氏、嘉川在住の郷土史家杉山正実氏、おおどのコミュニティ協議会事務局長寶川好子氏、古熊神社宮司真庭宗雄氏、山口商工会議所総務部柳谷統子氏、山口祇園祭鷺替委員会委員長山口孝郎氏（以上五十音順）など、多くの方々からご協力をいただいた。すべてのお名前を挙げることはできないが、ご多忙の処、数度にわたるインタビューに応じただいた上、貴重な史資料等の提供、さらに祭りや会議の際に見学及び取材の便宜も図っていただいたことに、衷心より感謝の意を申し上げたい。

最後に、本研究は平成27年度山口県立大学研究創作活動による研究成果の一部であることを申し添えておく。

参考文献

- 李修京・湯野優子「宇部の長生炭鉱と戦時中の朝鮮人労働者」『東京学芸大学紀要』人文社会科学系 I 59、2008年、pp105-119
- 伊藤幸司「大内氏の国際展開－十四世紀後半～十六世紀前半の山口地域と東アジア世界」『山口県立大学国際文化学部紀要』11、2005年、pp69-80
- 今八幡宮社務所編『鴻城鎮護』各号（2009～2015年全15号）
- 岩本通弥編『ふるさと資源化と民俗学』吉川弘文館、2007年
- 内田伸編『ふるさとの思い出 写真集 山口（明治・大正・昭和）』国書刊行会、1979年
- 宇部市史編集委員会編1993『宇部市史 通史篇 下巻』
- 宇部石炭支局編『山口炭田三百年史』広島通商産業局、1969年
- 江馬務『四季の行事 江馬務著作集』第8巻、中央公論社、1977年
- 小田庄一「夏祭り」『山口市制五十周年記念協賛 市民がつづるふるさとの今昔』山口市中央公民館、1979年、pp34-35
- 窪徳忠『窪徳忠著作集6 東アジアにおける宗教文化の伝来と受容』第一書房、1998年
- 栗林和彦『昭和の残像』山口教科書供給株式会社、2005年

- 五来重「七夕は棚幡」『宗教歳時記』角川書店、1982年
- 近藤清石『大内氏実録』マツノ書店、1974年
- 塩入亮乗「盆の期間をめぐる問題－七日盆を中心として」『仏教文化学会紀要』6、1997年、pp45－59
- 武元秀樹『祭りと地方都市－都市コミュニティ論の再興』新曜社、2014年
- 『中国新聞』昭和53年7月23日付
- 中村孚美「都市と祭り－川越祭りをめぐって」『現代諸民族の宗教と文化－社会人類学的研究』社会思想社、1972年(a)、pp353－384
- 「秩父祭り－都市の祭りの社会人類学」『季刊人類学』第3巻第4号、1972年(b)、pp149－190
- 「博多祇園山笠－そのプロセスと都市性（都市の祭り－都市人類学的考察<シンポジウム>）」『季刊人類学』18(3)、26－37、1987年
- 橋浦泰雄『月ごとの祭』岩崎美術社、1966年
- 『防長新聞』明治17年～昭和53年（縮刷版）
- 松尾恒一編『日本の祭り大図鑑 第2巻 先祖とともに過ごす祭り』ミネルヴァ書房、2014年
- 松平誠『祭りの社会学』（講談社現代新書）講談社、1980年
- 『都市祝祭の社会学』有斐閣、1990年
- 『現代ニッポンの祭り考－都市祭りの伝統を創る人びと』小学館、1994
- 『祭りのゆくえ－都市祝祭新論』中央公論新社、2008年
- 宮本常一『宮本常一著作集27 都市の祭りと民俗』未来社、1982年
- 柳田国男「踊の今と昔」『柳田国男集』第7巻、筑摩書房、1969年a、pp403－437
- 「日本の祭り」『柳田国男集』第10巻、筑摩書房、1969年b、pp153－314
- 「年中行事覚書」『柳田国男集』第13巻、筑摩書房、1969年c、pp3－177
- 山口県教育委員会『山口県の祭り・行事』2008年
- 山口市教育委員会『ふるさと山口』山口の文化財を守る会、1991年
- 山口市編『山口市史 各説編』1961年
- 『山口市史 地区篇』1971年
- 『山口市史』1982年
- 『山口市史 史料編 大内文化』2010年
- 山口商工会議所『山口商工会議所創立100周年記念誌』2008年
- 山口県文書館編『防長風土注進案』13巻 山口宰判 下、1983年
- 米山俊直『祇園祭－都市人類学のことをはじめ』（中公新書363）中央公論社、1974年
- 『天神祭－大阪の祭礼』中央公論社、1979年
- 『都市と祭りの人類学』河出書房新社、1986年
- 『小盆地宇宙と日本文化』岩波書店、1989年